

# 末黒野

すぐろの

11月号 (通巻819号)



# 迎 火

小川玉泉

百坪の整地の終り大夕立  
一匹の厨の蠅を仕留めけり  
背を撫づる風の涼しや皿洗ふ  
屋根を打つ日照雨の音や秋立ちぬ

薄く小さき祖母の硯を洗ひけり  
意のままにならず迎火燃え尽きぬ  
厨子の隅更けて奏づる鉦叩  
先師への思ひに更けぬ虫しぐれ  
早生みかん妻に供へぬ小祥忌  
虫すだく隣りの庭は闇の底  
信楽の皿に塩添へ衣被  
川よぎる江ノ電二両雁渡し

# 骨の音

松本三千夫

蹠を引く波の音秋立てる  
秋立つや竹の揺らぎの変らねど  
海岸へ路地路地抜けて秋暑し  
縫れては瀬音弾ます秋の蝶  
吸ふよりも吐く息長し秋の夜  
夜のちちろ肩を回せば骨の音  
十行の白の便箋涼新た  
虫すだく昼のグランドがらんど  
木槿垣書道師範と女文字  
近づけば稲の香こぼす棚田かな  
夕すすき灯台はまだ目覚めざる  
通り抜け出来ずと塀に萩の路地

# 甲矢集

配列は音順（当月巻頭作家は  
次号は末尾になり以下同じ）

## 星影

大橋伊佐子

万緑に入り万緑に迷ひけり  
 勞ひの一言汗を忘れけり  
 滴りの落つる刹那を光りけり  
 明日あると思ふ暮しの胡瓜漬く  
 寺町の真昼梅干す匂ひかな  
 涼しさの言葉はいらず吹かれをり  
 振りむけば振り向かれをりサングラス  
 星影の濡るる渚や秋立ちぬ  
 亡夫に酌む土産のワイン夜の秋  
 在すごと語りかけつつ門火焚く

## 盆東風

黒滝志麻子

片言の子に語気生まれ蝸牛  
 下山する子の眼のひかる捕虫網  
 薄紅の棚引く雲や朱夏の朝  
 花南瓜手押ポンプの水走り  
 かたはらの枝なぶりては水旗  
 法衣ぬげば僧も町人夜店見に  
 岩鼻を小舟の過ぎぬ土用あい  
 対岸に手を振る少女今朝の秋  
 盆東風や少年父をしのぐ丈  
 つながりて群がりてはや赤とんぼ



# 乙矢集

配列は音順（当月巻頭作家は  
次号は末尾になり以下同じ）



薫風 吉田きみえ

蟬しぐれかつて夫との散歩道  
初めての曾孫大暑の明けの風  
薫風や母の忌日の墓洗ふ  
買物を兼ねての散歩合歓の花  
鷺草の白あそばせて風の庭  
友よりの旅のしるしや飛驒団扇  
夜の秋家路を急ぐ喪の帰り

行々子 森清堯

夏野 石黒興平

初蟬の張りある声の朝かな  
炎天や近くて遠きマーケツト  
空蟬の背にためらひなきごとく  
暮れぎはの中州ふるはせ行々子  
忽と星へ立たるる夏の別れかな  
西窓に裾までの富士今朝の秋  
仙翁花木洩れ日揺るる奥社径

悼 熊切修様

高校野球神奈川地区予選三句

捨畑のすでに夏野となりにけり  
万緑を縫ひゆく登山電車かな  
出格子の風の涼しや飛驒民家  
牧牛の水場に群るる夏野かな  
炎昼の場外に消ゆホームラン  
給水に走る審判日の盛り  
九回まで投げ抜き球児涼しき目

風 入 れ 岡 田 史 女

涼しさや石敷きつめし坂の町  
青竹の蓋ある井戸や蟬時雨  
鷺草のそよぎて人を誘へり  
風入れや二丈を超ゆる曼陀羅図  
喪続きの二日を雷のはげしかり  
台風裡生駒山の裾に十日ほど  
妻恋う謹悼 熊切 修様て旅立たれしや晩夏光

岩 清 水 岡 野 里 子

ひとしきり心を放ち夏座敷  
現し世の消えて清すずしき簾かな  
掬ひたる山の匂ひや岩清水  
稜線の雲脚早し青田波  
音高き里の小流れ雲の峰  
乾びたる木道の風野萱草  
赤いのがちゆきと幼やかき氷

風 死 す 加 藤 静 江

風死して四方の鳥語の昂りぬ  
大池や蓮の蕾の二つほど  
堰落つる音の高まり蒲の花  
翅欠けの蟬の生れぬ広島忌  
新涼や熱帯の名のジャズを聴く  
風と来し精霊蜻蛉忽と消ゆ  
釣謹悼 熊切 修様しのふ相寄る星の煌めけり

白 扇 菅 野 日 出 子

累累と牧草ロール夕茜  
秋興や亡夫との旅の朱印帳  
白陀師の墨痕著し白扇  
ひぐらしの鳴いて寺領の寂深め  
やうやくに職決まる子やメロン切る  
花の香のあふるるホールパリー祭  
東雲の池をかこめる蓮見かな

# 青炎集

## 小川玉泉選



横浜 山崎 稔子

横浜 杉本 裕子

杣道や夏鶯の谷渡り

風鈴の幽かなる音や目の冴えて

**たまに鳴る鉄風鈴や沙汰なき子**

あぢさゐの錆びたる彩や陶器めき

台楓逸れ光芒波を煌めかす

青芒の花穂を見ずに逝き給ふ

悼 熊谷 修棟

横須賀 大川 暉美

横浜 橋場 美篤

波の音添へて老舗の夏料理

**さりげなく読経の僧へ団扇風**

壁に影映す仏間の盆灯籠

牧水の歌碑を目で読む夏帽子

打止めや花火夜空を染め上げて

夏祭うかれ幼の背に躍り

初蟬や晴れ渡りたる雨後の空

御手洗に雀水浴ぶ梅雨の晴

盆踊団地の窓のみな点り

すずかけの並木の長し蟬しぐれ

**雷の一打に畳み屋台店**

髪切るや夏痩せ顔の丸く見ゆ

横浜 橋場 美篤

ひき算の余生の気力水着干す

廃線の隧道の径滴りて

**都会出の夫や夏蚕に触りもし**

山頂の吟詠と和すほととぎす

竿灯の演技終へし子汗滂沱

笛の音にしなる竿灯闇照らす



横浜 岩上行雄

雨上がり蟻積む土の新しや

**ふところの稚拭く母の玉の汗**

家路急ぐ冷やしメロンを思ひ出し

瓜きざむ音の調子の出でにけり

憂き思ひ消えたり草をむしりゐて

沙羅の花正義派にして優しかり

横浜 及川照子

目薬の一滴涼し夜の静寂

涼風や五感と窓を全開に

兄に付く弟真つ新な捕虫網

牛蛙野外授業の輪の中に

**歩荷行く無言の一步また一步**

身をほぐす母の形見のあつばつば

横浜 高橋 明

飛石の形さまざま四葩鏝ぶ

**大の字に寝て古里のかんこ鳥**

蒙古斑残る裸や口達者

ひまはりの揺れて声わく保育園

雷の遠のく軒のしづくかな

馬の眼にひとときは燃えて夏落暉

横浜 斉藤マキ子

涼しさや船のかたちに灯の点り

にぎやかに苦勞ばなしや夕端居

車座の一人に西日濃かりけり

ラケットを重ねて樹下のソーダ水

引き売りの暗算力や茄子トマト

**燻らせて煙草を兄へ魂迎へ**

横浜 佐藤良二

一滴の目薬沁むる今朝の秋

灯籠の潮目に乗りて流れけり

揺るる藻にほたるとび交ふ町の川

足元の闇を氣遣ひほたる待つ

秋立つや宿の朝餉の五穀米

**秋蟬の壁にふれては落ちにけり**

横浜 根本公子

**閉ぢられしままの錢湯夏燕**

吊ることもなき蚊帳展げ半夏生

落武者の伏せしやぐらや蟬の穴

竹林のさやぎにとるむ夏座敷

ほほづきや遊びし玩具毬ひとつ

露草の露にまみれて雀どち

# 耕 土 集

松本三千夫選

姫路城守備の昔や夏の宵

祭来て吼へる牛鬼かほ真赤

みんみの誘ひ鳴きして雨上る

寿陵掃き生きて八月十五日

終戦日語る相手の見当らず

横浜 宮地静雄

雪溪の雄山迫りて我小さき

峰映す池雪溪に抱かれをり

雷鳥の足元低く飛び立てり

湧き上がる雲從へてお花畑

黒部湖の水の蒼さや晩夏光

川崎 滋野 暁



被災地の島の泊まりや合歓の花

朝風や復興継なくさつば船

敗戦忘かすかな記憶忘れじと

曲屋の農具展示や秋涼し

瓦礫中居場所を確とカンナ燃ゆ

西東京 石井 雲雀

雪溪を渡り参道石畳

霊峰の護符を頼りや霧の尾根

雷鳥の霧より出でて霧に入る

強風を耐ふる岩場や山桔梗

秋立つや立山連峰晴ればれと

横浜 布施由岐子

二坪の野菜畑や天道虫

あんみつや他愛なき事喋り合ひ

手拍子や浴衣の足はスニーカー

雲海や彼方に湖の垣間見え

伊吹山湖の風来る大花野

狭山 沼崎 千枝

半袖の二の腕豊か妻の夏

雪溪の遠き小屋の灯明の星

雲海に浮かぶ富士の嶺茜空

百合の香を辿る夕暮友白髪

山頂に並び寝ころぶ星月夜

川崎 田中 繁夫